

別所地区地すべり関連区画整理事業に伴う
有ノ木遺跡発掘調査報告書

1997年3月

玉湯町教育委員会

序

玉湯町はその名が語りますように、古くから玉作りが盛んな土地です。山雲国風上記には度々、玉作の記述が見られ、それを裏付けるように玉湯町には国指定の山雲玉作跡をはじめとし、多くの玉作り遺跡が存在しています。現在でもその技術は古代人からの私たちへの贈り物として大切に引き継がれ、伝統工芸のめのう細工としていきづいております。また、玉湯町の特産品として島根県内外から訪れる方に喜ばれ、私たちも誇りに感じています。

この度は、別所地区地すべり関連区画整理事業に伴い、玉湯町林村別所地区の有ノ木遺跡について発掘調査を実施しました。その結果、おびただしい量の炉壁や土器が出土しました。残念ながら、明確な製鉄関連遺構は検出されませんでしたが、この周辺にかなり大規模なタラ跡が存在することはほぼまちがいないと考えられます。

今後、玉湯町内における製鉄遺跡と玉作遺跡の関連を解明することにより、この地が一人生産地として出雲部においてどういう役割を担っていたかを知ることができます。

最後になりましたが、調査にあたって、ご協力、ご指導をいただいた土地所有者の方々、近隣の皆様、玉湯町土地改良区、島根県教育庁文化財課、文化庁などの各位、各機関に厚く御礼を申し上げて、報告書発刊のご挨拶とさせていただきます。

玉湯町教育委員会

教育長 兼 本 帳

例　　言

1. 本書は玉湯町教育委員会が玉湯町土地改良区の委託を受けて実施した別所地区地すべり関連区画整理事業に伴う有ノ木遺跡の発掘調査の報告である。
2. 遺跡は、島根県八束郡大湯町林村1039-1番地に所在する。
3. 調査は平成8年10月12日から平成9年1月28日まで実施した。
4. 調査体制は以下のとおりである。

事務局 兼本暢（玉湯町教育委員会教育長）

勝部衡（出雲工作資料館館長）

調査員 片岡詩子（玉湯町教育委員会主任主事）

金森みのり（同嘱託）

調査指導 杉原清一（島根県文化財保護指導員）

作業員 渥田定良、佐藤安雄、中島政恒、長崎二郎、石原俊幸、

小室幸、小室キヨエ、松浦須美江、福間きくよ、岡本千代子、

山本岸枝、山本トシ子、稻田トメ子、渡部民子、犬山安子、本多一子

遺物整理員 高橋幸江、浪花真由美、曾田葉子、難波純子

5. 調査にあたっては、渡部佳男氏をはじめとし、土地所有者の方々に多大な協力を得た。

また、玉湯町土地改良区の方々にもご協力をいただき、あわせて感謝の意を表したい。

6. 本書の執筆、編集は片岡が担当した。

7. 本書に掲載した検鏡写真は杉原清一氏撮影によるものである。

8. 插図中の方位は調査時の磁北を示す。

9. 本書に掲載した地形図は国土地理院発行のものを使用した。

10. 本遺跡出土遺物及び実測図、写真は玉湯町教育委員会で保管している。

目 次

1. 位置と環境	1
2. 調査に至る経緯	3
3. 調査の経過	3
4. 調査の概要	5
第1調査区	
第2調査区	
第3調査区	
5. むすび	26

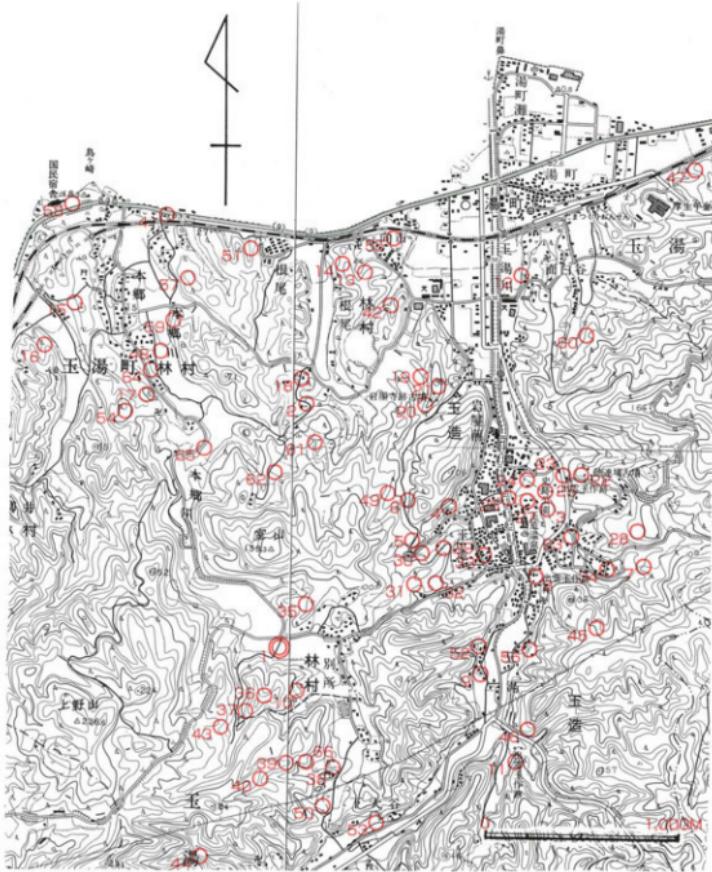
1. 位置と環境

今回調査を実施した有ノ木遺跡は国道9号線から約2km南下した八束郡玉湯町林村別所に所在する。上野山から流れる砂子谷川と本郷川合流点に接する地点で、丘陵南側の緩斜面に広がっている。標高は65m～75mで、現在は水田及び畑地である。林の地名は出雲国風土記でその起源を知ることができる。『拝志郷。郡家正西廿一里二百十一歩。所造天下大神命將平越八口為而幸時、比處樹林茂盛。爾時詔、吾御心之波夜志。詔。故云林。神龜三年。有正倉。』現在のところ拝志郡の比定地は玉湯町から宍道町来待の範囲と推定されている。玉湯町では旧石器～弥生時代の遺跡はほとんど発見されていないが、宍道湖に面する鳥ヶ崎遺跡では旧石器時代後期の石器や磨消し文のある縄文土器の破片などが採集されている。

古墳時代には碧玉の原産地である花仙山（標高199m）を背景に玉作りが全盛となり、多くの玉作り工房が存在した。なかでも、宮垣地区、宮ノ上地区、玉ノ宮地区などは国指定を受けており、宮垣地区は史跡公園として整備されている。林村においても本遺跡をはじめとし、ソリ田遺跡、宮畠遺跡、神田遺跡、大口遺跡、脇田遺跡などの玉作り遺跡が知られている。また、本遺跡から砂子谷川を約300mさかのぼると砂子谷タカラ跡があり、砂子谷に面する平坦地で多くの製鉄関係の遺物を採集することができる。古墳は林村に集中しており、そのうち本郷川下流沿いから河口に向かう低丘陵上に築造されている林古墳群は前方後円墳が4基、方墳1基、円墳46基と膨大な数にのぼる。なかでも全長18mを測る林43号墳は農道敷設のため現在は移築されているが、6世紀中期～後期の前方後円墳である。1984年の発掘調査では水晶製の切子玉、埋れ木製の鏡玉、ガラス玉など多くの副葬品が須恵器とともに出土した。また、8号墳石室入口の閉塞石にはかん抜き文の浮き彫りがみられる。その他、周辺には長畠古墳群（円墳7基）、塚ヤブ古墳（円墳）、宮の奥横穴群、寺ノ空横穴群、穴薬師横穴群、大槻谷横穴群などがある。

律令時代以降になると全国的には玉作りが消滅するが、玉湯町内では引き続き生産が続けられていた。史跡公園西側に隣接する蛇喰遺跡や本郷川中流の右岸に位置する六反田遺跡では8～9世紀代の須恵器とともに平卡未成品を中心とした玉関係の遺物が出土している。また、林氏の私寺と考えられる松ノ前庵寺が別所地内に建立されており、礎石や軒丸瓦、鬼板瓦などの古瓦が出土している。平成7年度の試掘調査でも場所は特定できなかったが、白磁片や平瓦が出土しており、近くに存在していた可能性は大きい。

中世になると林氏関連の居城と考えられる山城が、本郷川下流の右岸にある標高71mの高い丘陵上に築かれ、曲輪、土堀、堀切が比較的良好な状態で残っている。



第1図 有ノ木遺跡と周辺の遺跡

- | | | |
|-----------------|--------------|------------|
| 1 有ノ木遺跡 | 23 徳連場横穴 | 45 鉢谷タカラ跡 |
| 2 宮畠遺跡 | 24 青木原古墳群 | 46 高畠谷タカラ跡 |
| 3 出雲玉作跡（宮垣地区） | 25 記加羅志神社跡古墳 | 47 助次郎跡群 |
| 4 或止道跡 | 26 小丸山古墳 | 48 八反田遺跡 |
| 5 渡止古墳 | 27 蛇喰遺跡 | 49 日出照遺跡 |
| 6 平床道路 | 28 梅原古墳群 | 50 大口遺跡 |
| 7 向新宮道跡 | 29 花立古墳群 | 51 小金松古墳 |
| 8 出雲玉作跡（宮ノ上地区） | 30 花立横穴群 | 52 鶴木谷遺跡 |
| 9 鶴原道跡 | 31 高尾古墳群 | 53 西遺跡 |
| 10 ソリ田道跡 | 32 大門小路横穴群 | 54 マコモ谷古墳群 |
| 11 出雲玉作跡（玉ノ宮地区） | 33 玉造案山古墳 | 55 向市遺跡 |
| 12 小丸子山古墳 | 34 新宮横穴群 | 56 古宝古墳 |
| 13 極楽寺古墳 | 35 長畠古墳群 | 57 中倉古墳群 |
| 14 報恩寺古墳群 | 36 穴築師横穴群 | 58 鳥ヶ崎遺跡 |
| 15 林古墳群 | 37 大槀谷横穴群 | 59 椿ノ木谷古墳群 |
| 16 雷古墳群 | 38 瑠璃谷古墳 | 60 半坂古墳群 |
| 17 頼清寺裏古墳群 | 39 宮ノ奥横穴群 | 61 幸床遺跡 |
| 18 根尾築山古墳群 | 40 寺ノ空横穴群 | 62 カツザキ遺跡 |
| 19 岩屋寺跡裏古墳群 | 41 小畠古墳群 | 63 元福荷古墳 |
| 20 岩屋寺跡横穴群 | 42 扇廻古墳 | 64 薩田遺跡 |
| 21 岩屋寺跡横穴群 | 43 砂子谷タカラ跡 | 65 野武大田遺跡 |
| 22 徳連場古墳 | 44 いもの畠タカラ跡 | 66 神田玉作遺跡 |

2. 調査に至る経緯

平成9年度に実施される別所地区地すべり関連区画整理事業に関して、玉湯町観光産業課と協議した結果、以前から周知の遺跡として確認されている有ノ木遺跡、ソリ田遺跡、松ノ前廃寺、埋れ木出土地点において、遺跡の範囲と性格を把握するため、平成7年度に試掘調査を実施することになった。各遺跡に 2×2 mのグリッドを数箇所設定し、調査を行なった結果、有ノ木遺跡において多量の炉壁や須恵器を含む遺物包含層が確認された。製鉄関係の遺構の存在が予測されたため、再度、関係者と協議をもち、今後の方針を話し合った結果、翌年の平成8年度に発掘調査を実施することになった。そこで、平成8年度には土地所有者からの了解をもらい、玉湯町土地改良区と埋蔵文化財発掘調査契約を交わした。さらに文化庁の国庫補助を得て、稲の刈り入れが終了した農閑期になるのを待ち、平成8年度の秋から本調査を実施するに至った。

3. 調査の経過

平成7年度に実施した試掘調査に基づき、10月12日に調査区を設定した。第1・2調査区ではすでに表土部分から多量に炉壁片が検出され、製鉄遺跡の存在をおわせた。しかし以前から個人で数次にわたって圃場整備が実施されており、とくに第2調査区においてはかなり下層まで搅乱を受けた形跡があった。第1調査区A地点では昨年度の試掘調査でも多くの須恵器が出土していたので丁重に掘り下げていったところ、第1調査区A地点西側のV層のところで包含層を確認した。さらにこれを追って、東側にむかって掘り下げて行くと、表土下約1.7mの地山上面のV層で多量の土器を含む遺物包含層を確認した。湧水に悩まされ、どろどろの状態で遺物をとりあげた結果、古墳時代前期～中期の包含層と判明した。地山はA地点の中央部で東側に急傾斜をもって落込んでいた。翌年の1月に入つてからは悪天候が続き、寒さが厳しくなるとともに壁に亀裂が入るようになり、これ以上深堀りするのは危険な状態になってきた。折りしも、圃場整備事業を担当している観光産業課から工事の掘削予定の深度が示され、すでに予定の掘削面より約70cm深い地点を精査していることが判明した。そこで、島根県教育庁文化財課と協議した結果、この地点で調査を中止することにし、他の調査地点も圃場整備工事にかかる掘削面までで調査を終えることにした。明確な遺構は検出されなかったが、A地点の地山面ではピットが数穴、B地点では南壁近くに炭化物の集積遺構が検出された。一方、第2調査区と第3調査区はいずれも盛土になるということであったので、第2調査区は表上下0.7m、第3調査区に至っては1.5mほど掘り下げていたが、この時点では遺物を取り上げ、1月28日に調査を終了した。

第2図 有ノ木遺跡調査区配置図



4. 調査の概要

平成7年度に実施した試掘調査に基づいて、遺物包含層が確認された地点を中心調査区を設定した。標高の低い段の水田から便宜上、順次第1～3調査区に分けた。第1調査区は標高69.12mの水田で、面積は629m²である。1m幅の畦を残し、西側調査区をA地点、東側調査区をB地点とした。B地点では炭の集積造構が検出された。第2地区は標高70.60mで、面積は920m²。東側より第1～第5トレンチまでを設定した。第3地区は標高71.53m。狭い谷間の出口に立地する146m²の水田で、かなりの沼地である。昨年度の試掘調査では水抜きがうまくいかず、膝上まではまったくため調査を断念したが、今回は2×3m(T1)と2×2m(T2)のグリッドを設定し、調査を実施した。出土遺物は炉壁片、玉未成品、須恵器、土師器、土製品、木製品、種子など多種多様であった。

第1調査区

A地点 本調査区は昨年度試掘調査を実施した際、須恵器が多く出土した地点である。中央に土層観察用の畦を残し、112m²の範囲を調査対象とした。遺物は耕作土からIV層まで小片を中心に少量の出土があるが、V層からVII層までは比較的まとまって出土した。I層は厚さ約20cmの耕作土、II層は茶灰褐色粘質土、III層は灰褐色粘質土である。南壁には排水用の暗渠が掘り込んでいた。IV層は暗灰褐色粘質土で炭化物を含む。やや粗い砂まじりであった。IV層下層で中世のものと考えられる木製の下駄(写真図版32①)が出土している。この下駄は全長22.5cm、幅11.2cm、厚さ2cmを測る。表面には花絞を通した丸い穴が3ヶ所、四角の穴が4ヶ所、裏面にも歯を装着したと思われる縦長の穴が残っていた。断面は船底型を呈す。先端部分には足の指痕が残り、右寄り部分の凹みがやや深いことから親指の跡と推定され、左足用と考えられる。II層からIV層までは金気を帯びた上層であった。V層の暗褐色粘質土は深いところで0.4mほど堆積しており、やや粘りが強い。植物遺体や腐食した木片、種子を多く含む。ここからは須恵器、土師器などが出土しており、摩滅したものが目立つ。調査区東側ではVI層の茶褐色粘質土がみられ、約0.2mの堆積を測る。粗い砂を含み、小片の遺物が出土した。VII層は黒灰褐色粘質土で水分を含み、やや軟質。調査区西側では深さ0.5mのところで灰白色粘土上の地山が検出され、そのまま東側に向かって緩やかに傾斜していくが、調査区中央部で急角度をもって落込む。落込んだ地点のVII層の下限は確認できなかったが、検土杖を差込むと、まだ1m以上の厚い堆積が認められる。この層からは遺物が多量に出土しており、土器溜まり状態になっている。残存状態もよく、接合可能なものが集中してしていることから、当時、廃棄されたものが流されず、原位置を保ったまま残っていると思われる。出土遺物の多くは土師器の甕で、他に瓶や甌、須恵器が見られた。造構は調査区北側の北西隅と南側の地山面でピット群が検出された。

遺構

ピット群 計12穴のピットが検出された。最大もので、径70×25cm、最小のもので径8×8cmであった。深さは30cm未満のものがほとんどだが、最も深いもので56cmを測る。いずれも遺物は伴わず、性格は不明である。

遺物 遺物が比較的まとまって出土したV層とⅧ層の遺物について述べることにする。

V層出土遺物 十師器、須恵器、玉未成品類、土製品、種子が出土している。須恵器の山上が多くみられる。時期は古墳時代中期から平安時代までと混在している。

土師器（第6図1～4、7、9、10、12、第7図9）

壺 第6図1～4、第7図9はいずれも単純口縁で逆八の字状に開く。口径は16.6cmから17.6cmを測る。1～4までは口縁部のみであるが、外面には横方向になでた形跡が残る。第7図9は内面にケズリ、外面にはハケメ調整を施している。

瓶 第6図7は胴部がやや直立ぎみに立ち上がり、口縁部は逆ハの字状に外反する。

杯 第6図9はほぼ完形をなす碗形である。口径は13cm、器高は7cmを測る。口縁部が内傾している。外面にはハケメ、内面には暗文を施す。

高杯 第6図10は杯部だけが残存する。碗形を呈し、やや内湾して立ち上がる。口縁端部はやや外反する。内面には暗文、口縁部外面には横方向のナデがみられる。12は高杯の脚部と思われるが、摩滅が著しく調整は不明。

須恵器（第11図）

蓋 1、2はいずれも口縁内部にかえりがつくものである。

皿 7、8は体部がやや丸みを帯びて立ち上がり、口縁部がやや外傾する。底部は回転糸切り未調整である。12は高台付皿で、口径19.5cm、器高3.5cmを測る。高台はやや外向きに付き、体部は逆ハの字状に開く。

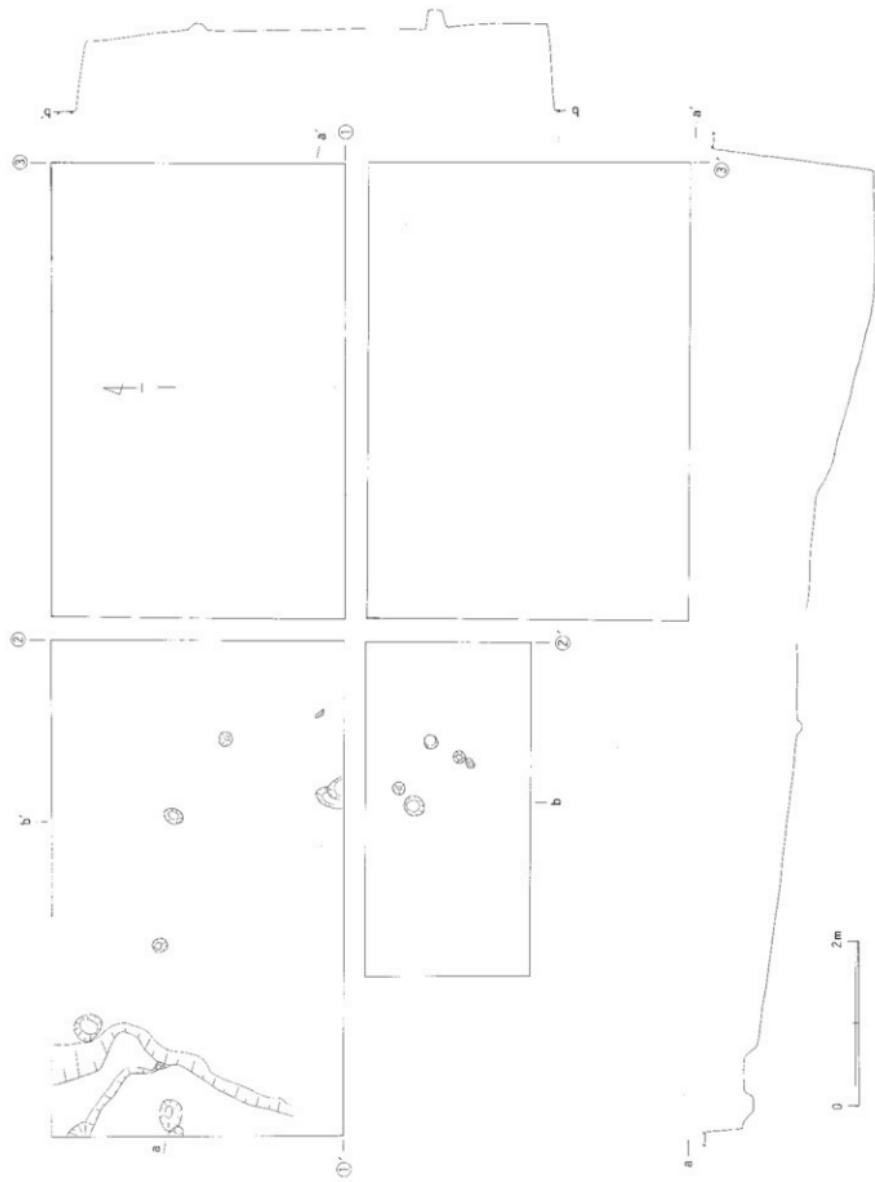
杯 3～5は底部から内湾気味に立ち上がり、口縁端部を内側につまみだす。6はやや外反させる。4の底部には回転糸切り痕を残す。9は小型の杯で口縁部がやや外反する。底部は糸切りの後、横方向にナデ調整が入る。焼成はやや軟質で赤褐色を帯びる。13は杯身の破片。立ち上がりが長く内傾する。11は高台杯である。体部は逆ハの字状にひらき、高台はやや外向きにつく。底部には回転糸切り痕を残す。

高杯 14は高杯の杯部と思われる。内湾気味に仕上げ、口縁端部をやや丸く内側に傾けている。体部内面には横方向のナデが見られる。15は高杯の脚部片である。外面には、かきめ調整を施し、透かしの痕跡が残る。脚部端部は屈曲する。

壺 10は壺底部の高台部分のみが残っている。底部内面には不整方向のナデがみられる。

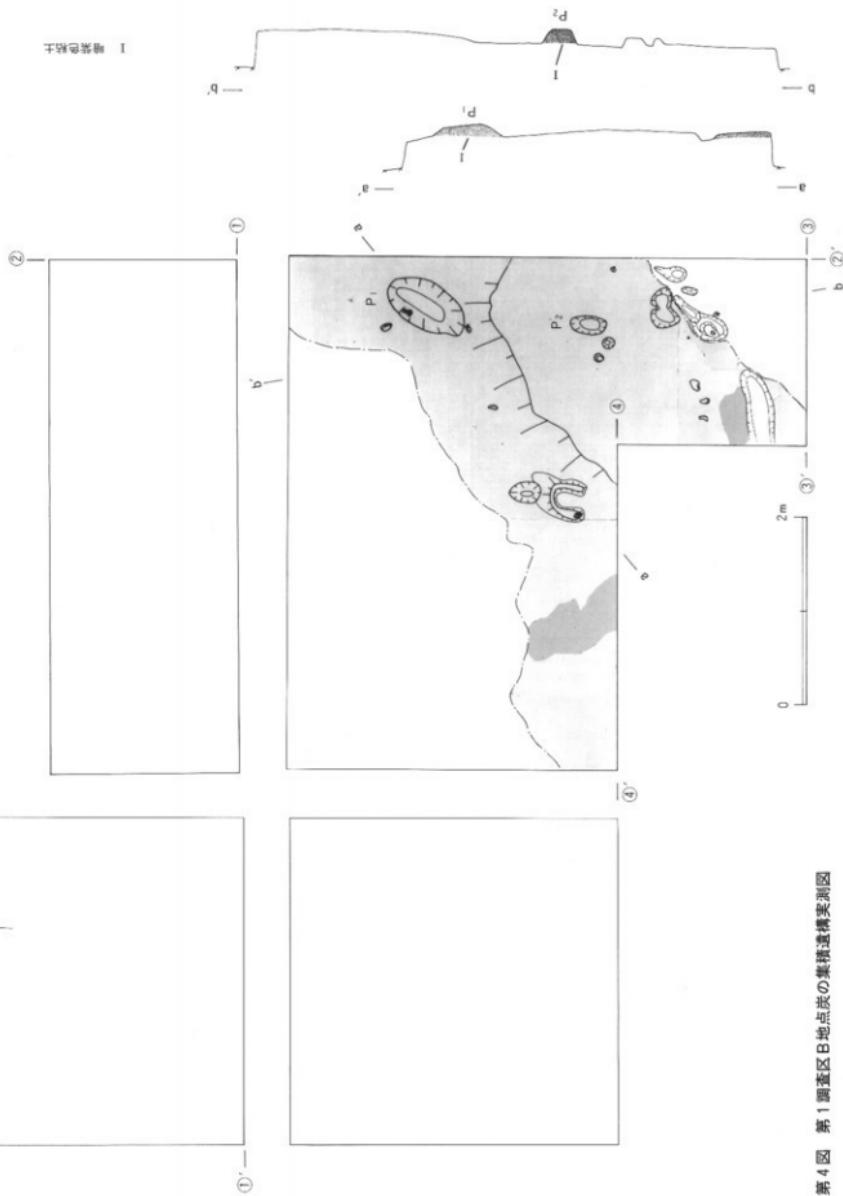
玉製品（第16図1、4、6） V層からは計126点の玉未成品、剥片、原材が出土した。石材には碧玉、めのう、水晶、滑石が用いられ、平玉未成品、管玉未成品、丸玉未成品が出土している。

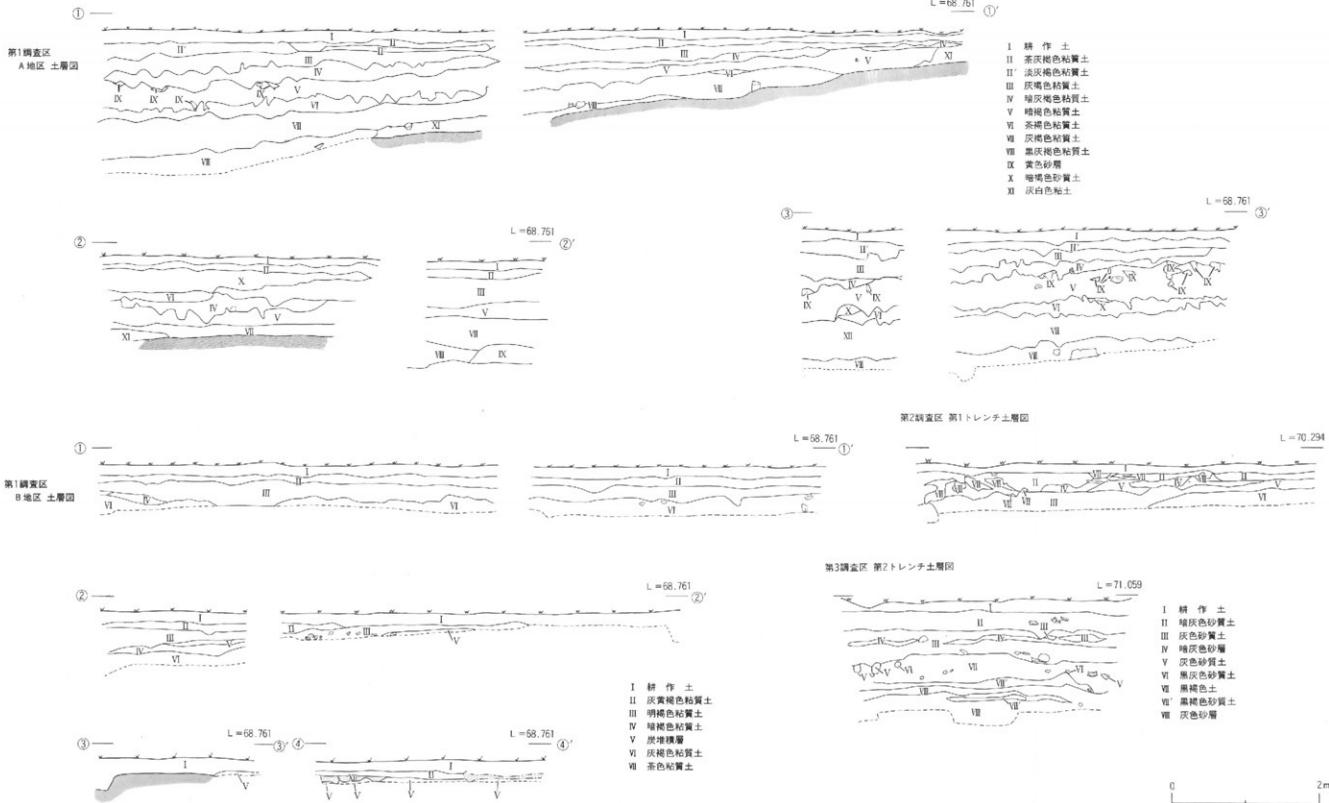
管玉未成品 1は碧玉製で長さ3.3cmを測る。側縁部に剥離調整がみられる。



第3図 第1調査区A地点ビット群実測図

第4図 第1調査区B地点炭の集積遺構実測図





第5図 第1・2・3調査区土層図

丸玉未成品 4は水晶製。径1.7×1.5cmで、敲打痕を残しながら全体に剥離調整を施す。
平玉未成品 6は碧玉製で、径5.6cmを測り、全面に研磨を施している。穿孔を一方の側面から試みているが、ほぼ貫通する寸前で割れてしまっている。糸湯町内の玉作遺跡で穿孔のある平玉未成品が出土したのははじめてである。

土製品（写真図版24・26）七製支脚の突起部と脚柱部の一部が出上。いずれも摩滅が著しく、調整は不明。その他、瓶のものと思われる把手が出土している。また、径3.5cm、厚さ0.8cmの球状の土製品が2点出土。いずれも半壊しているが、手くねによるものである。石製品（第19図2）はずみ車と考えられる。径8×7.5cm、厚さ2.3cm。中央部を平坦に研磨し、周辺部には粗い削り痕を残し、側面にも面取りがなされている。中央には0.8cmの穿孔があり、貫通している。断面は蒲鉾状を呈す。凝灰岩質砂岩系の加工しやすい石材を使用している。

種子 モモが74点、ウメが1点出土。モモは径2.5×2cm、厚さ1.5cm前後のものが多い。

VIII層出土遺物

この層からは多種多様の土師器、須恵器が出土しており、古墳時代前期から中期のものが中心と考えられる。その他には、玉未成品類や工具、木製品、土製品、種子がみられた。

土師器

甕A（第8図1～4、第7図1～8、10～12、15、第6図5、6、8） 図示したものは口縁部がほとんどであるが、接合すれば完形品になるものもある。いずれも単純口縁で、逆八の字状に開く。口径は最大のもので26cm、最小のもので11cmと様々で、ややばらつきがある。技法的にはいずれも体部内面へラ削り、外面にはハケメ調整が施してある。第8図1は唯一完形に近いものであるが、胴部は球形をなし、底部はやや平坦に仕上げてある。多くの煙に火を受けた際の剥脱痕や煤の付着がみられる。第8図4は頭部が直立気味に立ち上がり、口縁部で外反する。口径は18.5cmを測る。調整は体部外面がハケメ、内面がヘラ削り調整。煤が厚く付着する。第7図11は口径11cmを測る小型品。

甕B（第7図13、14） いずれも二重口縁をもつ甕の口縁部片。14にはわずかながら頸部のくびれ部外面にハケメ、内面にはヘラ削りの痕が残る。

杯（第6図11） 瓢形を呈し、内湾気味に立ち上がる。磨滅が著しいが外面がハケメ調整、口縁部には横方向のナデがみられる。

高杯杯部（第6図13、第9図3、4） 基本的には外面にハケメ調整、内面には放射状の暗文を施す。第6図13の杯部は瓢形を呈し、内湾気味に立ち上がる。口縁部外面にはナデ調整がみられる。第9図3、4の口縁端部はやや外反する。

高杯脚部（第9図5、6、8） 比較的残存状態のよい5、6は裾部が八の字状に開き、端部に回転ケズり後ナデを施し平坦にする。筒部には縱方向の削りがみられる。内面にはシリット、裾部の内面には指頭圧痕を残す。5の脚部中央には径0.5cmの刺突痕を残す。

低脚杯（第9図1、7） 1は口径13.5cm、器高8.0cmの完形品。杯部は内湾気味に立ち上がる。外面は横方向のハケメ、内面には暗文を施す。脚部高は2.8cmと低い。内外面とともにナデ調整がみられる。7は杯部の底部に暗文が残る。脚部外面にはヘラ磨きを施す。

脚杯（第9図2） 杯部は他の器種に比べるとやや深く、残存部だけでも7cmを測る。体部は逆八の字状にひらく。外面には綫方向のハケ目、口縁部内面にハケメ調整を行い、底部近くにはわずかに暗文が残る。

小型丸底壺（第9図9） 口径は約10cm。体部は丸みを有するが、口縁部は外方向に大きくひらく。摩滅が著しく、調整は不明であるが、体部内面にわずかながら指頭圧痕が残る。

杯（第9図10） 口径は10.2cm。底部近くの外面には指頭圧痕が残る。

瓶（第10図1～3） いずれも断片が残る。1の把手は牛角状を呈し、指頭圧痕が残る。調整は外面にはハケメ、内面にはヘラ削りを行う。体部は緩やかなカーブを描く。2、3は直立気味に立ち上がり、口縁部でやや外反する。調整はいずれも体部外面にハケメ、内面がヘラ削り調整。

甌（第10図4） VII層からは完形品はみなかったものの、かなりの甌の破片が出土している。体部は欠損しているが、焚き口の上縁部にあたる鈷と受け部が残る。鈷は最大厚2.3cmを測り、肥厚する。受け部の外面には綫方向にハケメ調整がみられ、内部は煤が厚く付着している。

壺形土器（第10図5） 体部はたまご形を呈し、口縁端部をやや外方向につまみだす。径0.9cmの穿孔がみられる。外面はハケメ調整、内面はヘラ削りを施す。

器種不明（第10図6） 断片のみ。外面は強いなでによる凹線とハケメ調整がみられる。内面はヘラ削り。器厚は1.5cmとやや厚い。

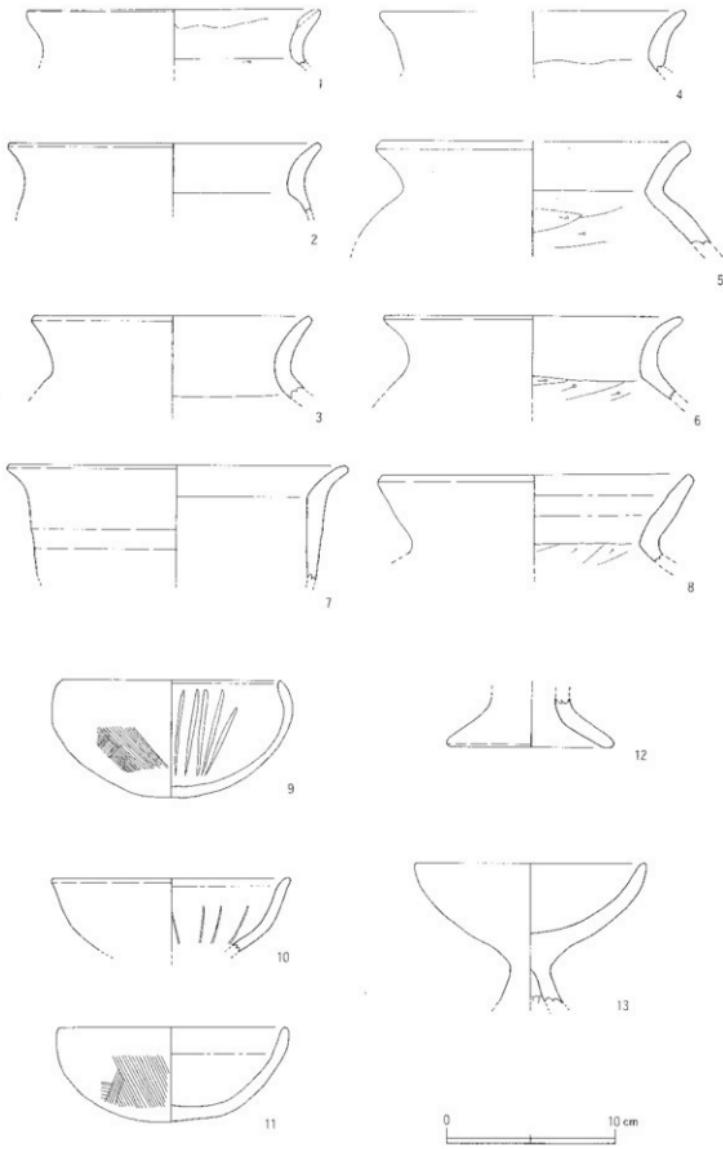
須恵器（第12図1～6） 土師器に比べると出土量が少ない。

甌（1） 口縁部の小片。甌になると考えられる。口縁端部は肥厚し、やや内傾する。外面には沈線と櫛描波状文を巡らせる。

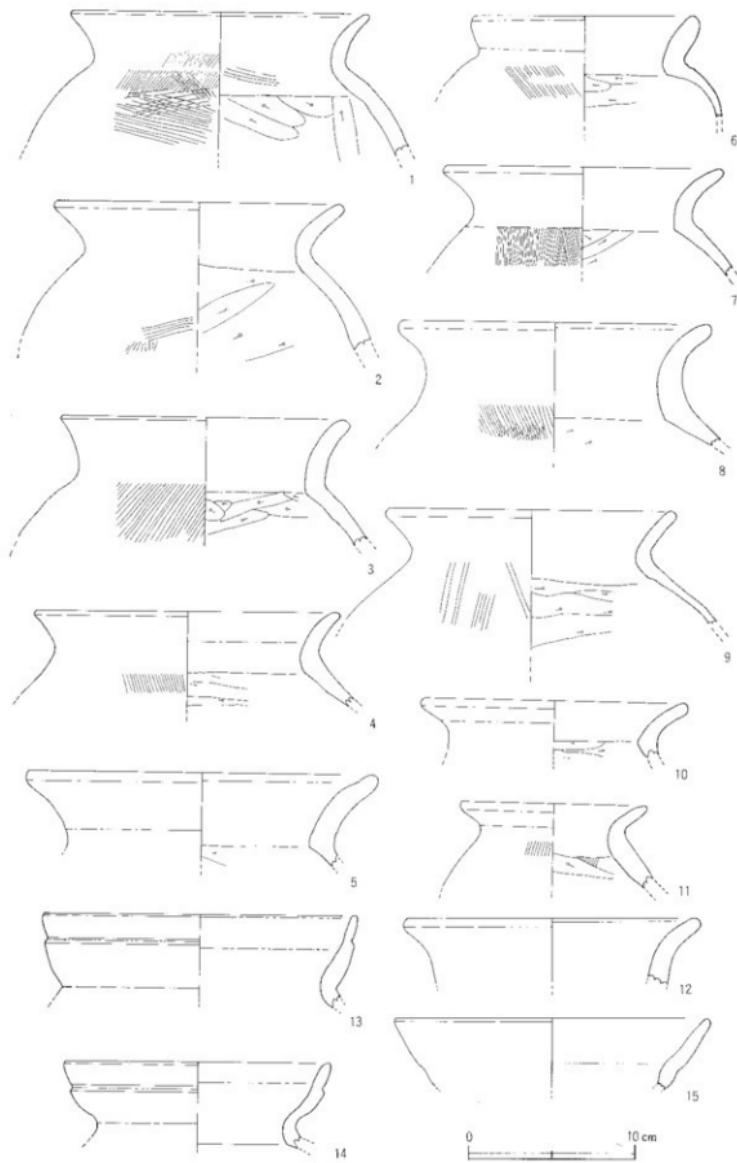
蓋（2） ほぼ完形の蓋。口径は12cmと小型品。天井部はやや丸みを帯び、径4cmのつまみがつく。外面には天井部と体部を分ける稜線が残り、二枚貝腹縁の刻み目を巡らす。口縁部はやや外向きに広がり、端部でわずかに膨らむ。天井部外面にはヘラ削り後ナデ調整がみられる。

高杯（4、5） 4は透かしの残る高杯の脚部。外面にはかき目を巡らせる。脚部端部はやや屈曲する。5は杯部のみ残存しているが、高杯の杯部と考えられる。やや内湾気味に立ち上がり、口縁部では逆八の字状に広がる。体部外面には1条の沈線と櫛描波状文、底部にはカキ目を巡らす。

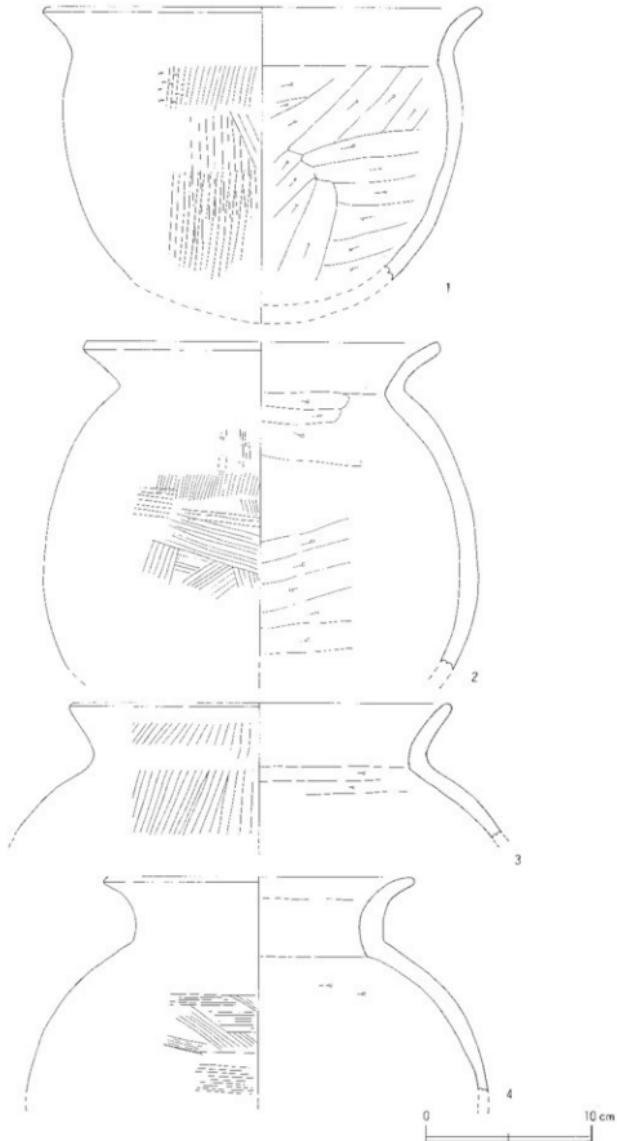
器種不明（3、6） 3の脚部高は2cmを測り、裾部は八の字状に広がる。底部径は6.4cm。杯部の底部内面にはナデ調整がみられる。6は球状をなす胴部片である。龜か小型甌と考えられる。最大胴部径は10.5cmを測り、胴部外面には波状文が施される。



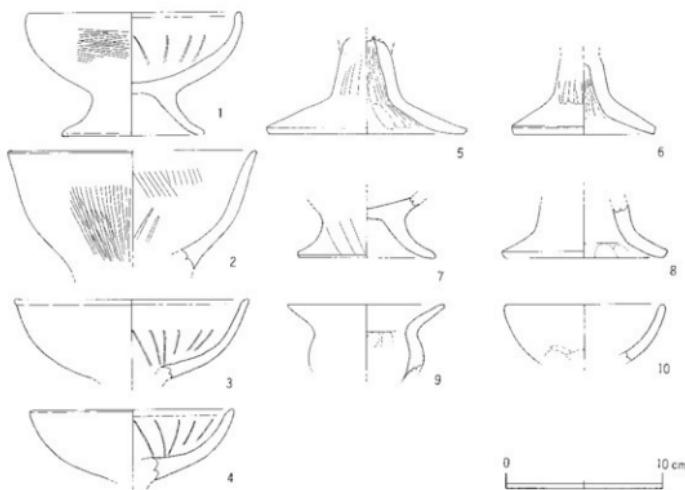
第6図 第1調査区出土遺物（土師器）



第7図 第1調査区遺物包含層出土遺物（土器）



第8図 第1調査区VII層出土遺物（土師器）



第9図 第1調査区遺物包含層出土物（土師器）

玉未成品（第16図2、3、7）工具（17図） 石材は碧玉、めのう、水晶、滑石が使用されており、原材から剥片まで約42点出土している。管玉未成品が6点、丸玉未成品が2点、勾玉未成品、ハンマーストーンがそれぞれ1点出土している。

管玉未成品（2） 碧玉製。細かい敲打痕を残し、側縁部からやや幅広の剥離を入れる。

丸玉未成品（3） 径 2×2.3 cmの碧玉製。細かい敲打痕とやや深めの剥離痕が残る。

勾玉未成品（7） めのう製で、長さ3.9cmを測る。背面に敲打痕と剥離痕を残し、両面には研磨を入れる。穿孔を試みた形跡がある。

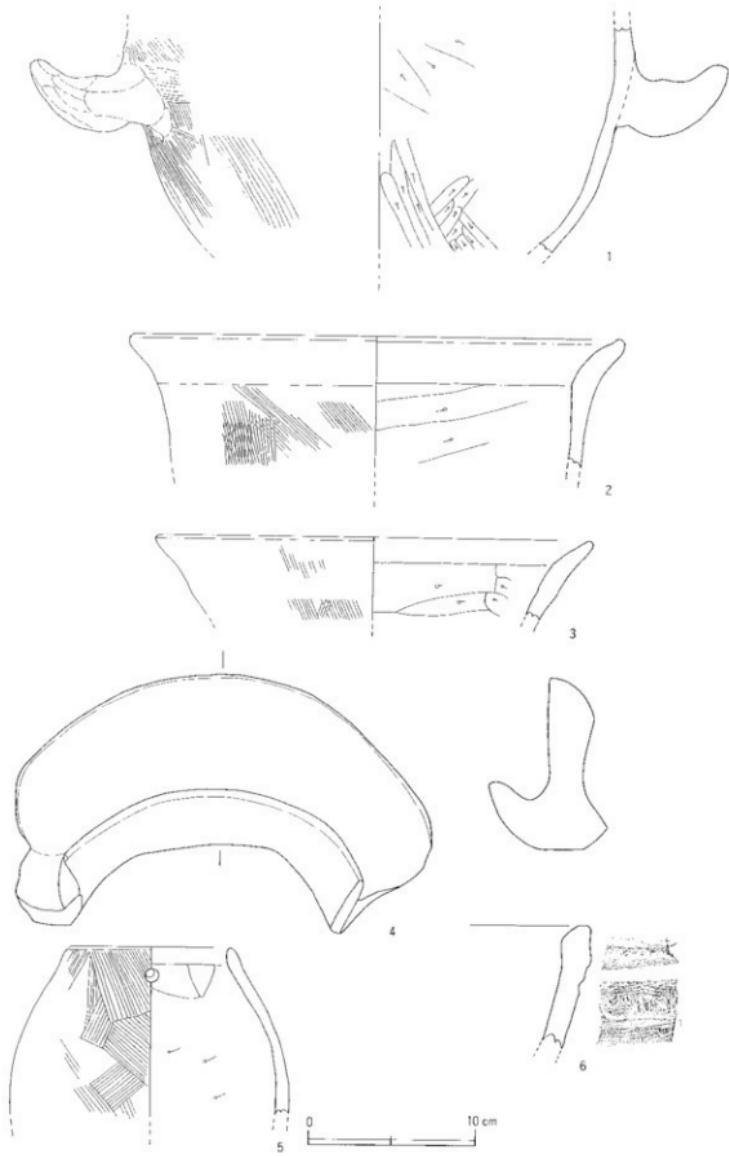
ハンマーストーン（第17図） めのう製。長さ5.7cm、幅4.6cmを測る。頭部に大きな剥離痕がみられるが、全体に粗い敲打痕を残す。縁辺部は使用頻度が多かったためか摩滅が著しい。

石製品（第19図1）はずみ車が1点出土している。上面は2.2cm、下面は4.3cm、厚さ2.5cmの台形状を呈する。凝灰岩系の石材と考えられる。

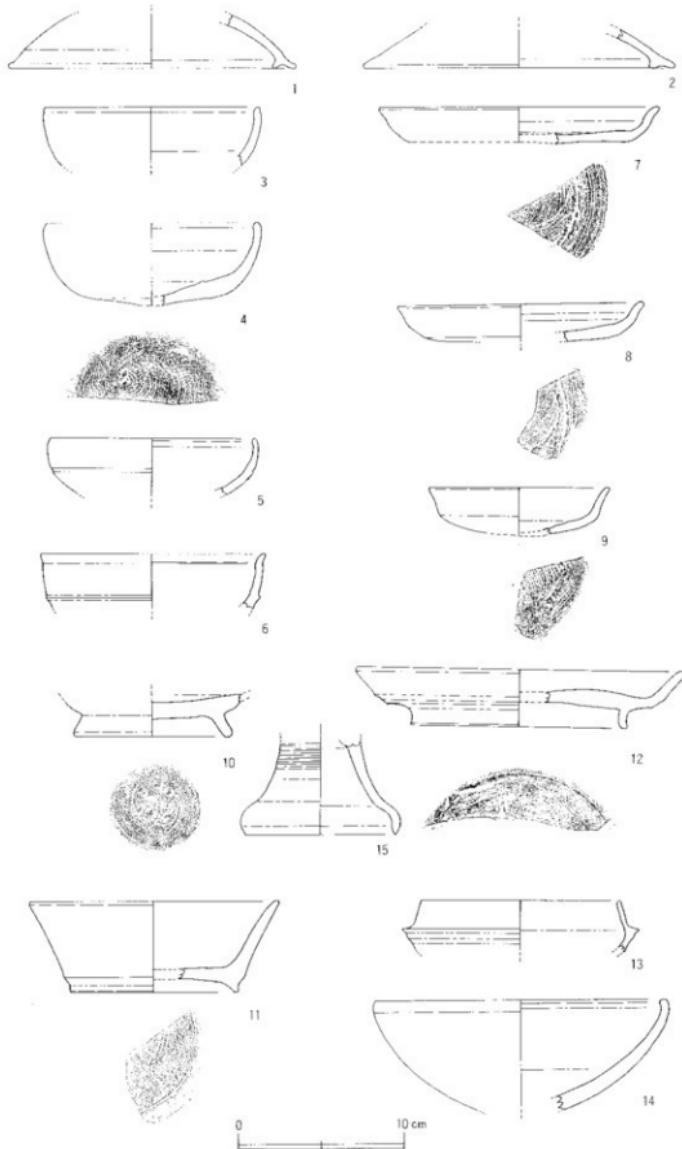
木製品（写真図版32②～⑧）

VII層からは比較的の残存状態が良好な木製品が出土している。②はつちのこ状木製品。長さ16cm、厚さ3cmを測る。長軸方向に幅1.5cm、長さ10cmの丁寧な削り痕が7面ほど残る。

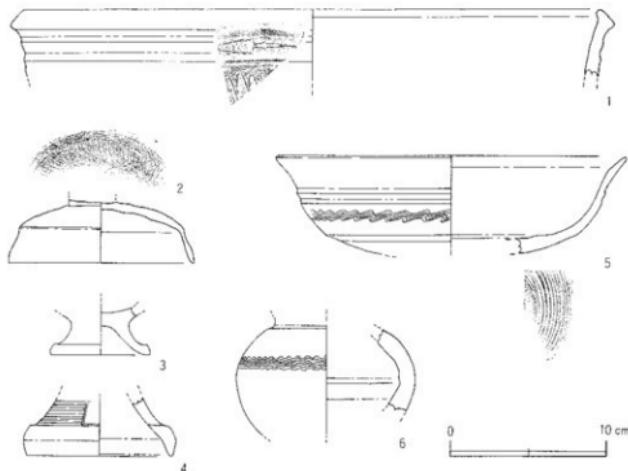
③は柾目材を使用。先端部に突起部をもつほぞ状木製品。全長10cm、厚さ3cmを測る。④は四隅に面とり加工した八角形状木製品。全長10cm、厚さ0.7cmを測る。中央部に径2.1cm



第10図 第1調査区VI層出土遺物（土師器・壺）



第11図 第1調査区V層出土遺物（須恵器）



第12図 第1調査区VI層出土遺物（須恵器）

の円形の孔を穿つ。柾目材を使用。⑤は全長35cm、幅16cm、厚さ6.5cmを測る。欠損品だが、平面には幅3cm、深さ2.5cmの溝が残る。⑥は残存部74cm、幅18cm、厚さ5cmを測る。一端部は欠落しているが、反対側の縁辺部は凹状に加工を施し、先端部にはやや丸みをつける。裏面には中央部に幅5.5cm、深さ1.5cmの溝が残る。⑦は柾目どりした大型板状木製品。全長94.5cm、幅37cm、厚さ2cmを測る。内端ともに切断面を残す。中央部に半円状の抉りを入れる。⑧は長さ33cm、最大幅15.5cmを残す柾目材。側辺部を斜めに切断している。

1995年度試掘調査出土遺物（第13図、第14図）

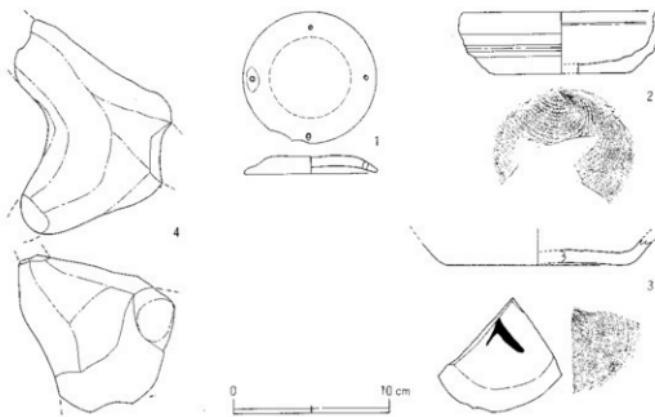
本調査区の最西部に設定した $2 \times 2\text{ m}$ のグリッド内から多量の遺物を出土した。ほとんどが須恵器であった。上層は今回の調査のV層に対応する。

須恵器製蓋（第13図1） 壺の蓋。口縁部径6.4cm、器高1.2cmの完形品。天井部は平坦でヘラ削り後、ナデを施し、四隅に径0.3cmの穿孔が認められる。穿孔は本体を製造した後のものと考えられる。内面には刃が塗られ、表面にも所々付着する。

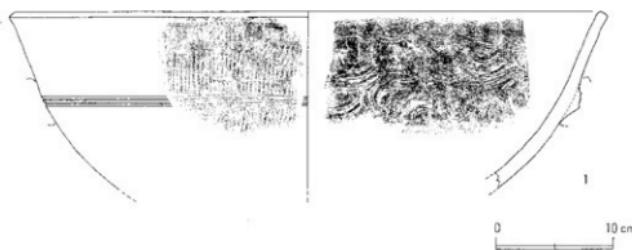
須恵器製杯（第13図2、3） 口径12.8cm、底部径8.5cm、器高4.0cm。体部はやや内湾気味に立ち上がる。底部には回転糸切り痕を残す。3は回転糸切り痕を残す底部。底部外面には墨書きが一筆残る。

土製支脚（第13図4） 突起部だけが残る破損品。調整は摩滅が著しく不明。

須恵器製鍋（第14図） かなりの大型品となる。口縁端部は強いナデにより平坦に仕上げ



第13図 1995年度試掘調査出土遺物（須恵器・墨書き器・土製支脚）第1調査区V層

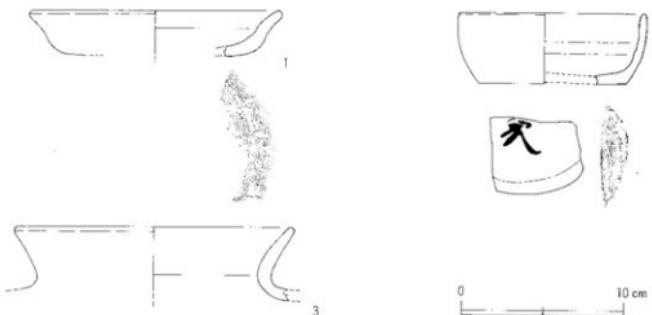


第14図 1995年度試掘調査出土遺物（須恵器）第1調査区V層

る。口縁部外面には浅い凹線、体部外面には2条の沈線を巡らせ、格子状の叩き目を施す。内面には同心円状の叩き目が残る。外面に把手を貼りつけた痕跡があるが、形状は定かではない。

B地点

A地点東側のやや南よりに調査区を設定。調査対象面積は 66m^2 。時間的制約もあり最も深い部分で0.7mまで掘ることになった。土層は基本的に耕作土、灰黄褐色粘質土、明褐色粘質土、暗褐色粘質土、灰褐色粘質土から構成され、いずれの土層中からも炉壁が出土している。III層の明褐色粘質土には現代の陶器片が出土しているところから、これから上層は擾乱層と考えられる。IV層の暗褐色粘質土には炉壁片や炭を多く含み、硬い。第2調査区の法面に接する西側調査区ではIII層下層に厚さ約10cmの炭が堆積している層がある。VI層の



第15図 第3調査区出土遺物（須恵器・墨書き器）

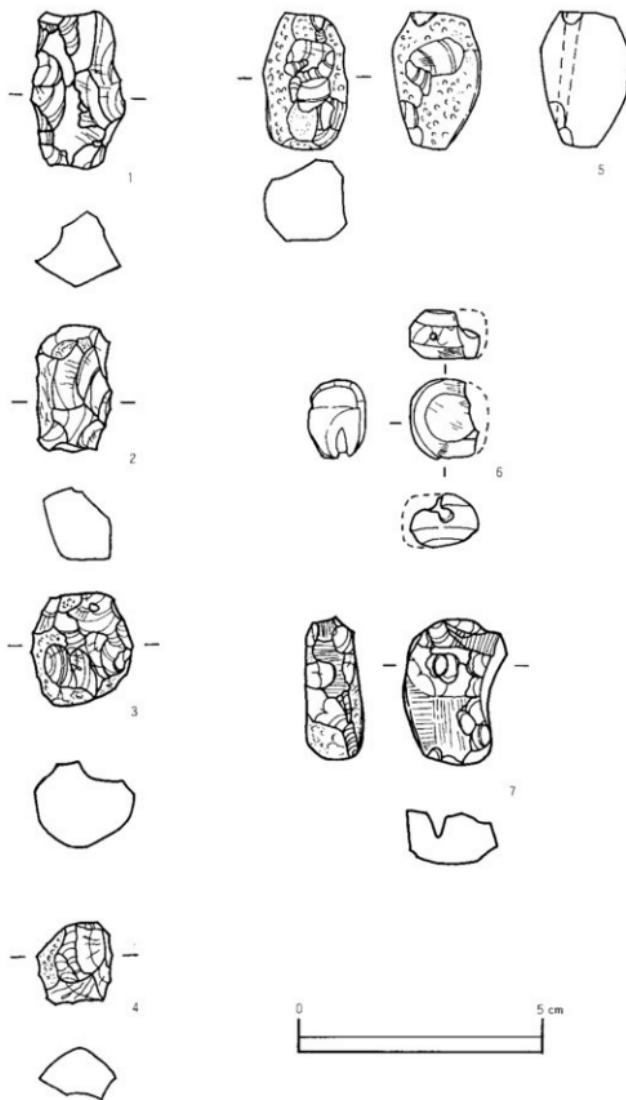
灰褐色粘質土は炭をわずかに含む。この層にはオレンジ状の縦筋がみられるが、これはV層中に含まれた鉄成分が下層に流れだしたものと思われる。④-④'の上層中には浅い落込みがみられ、茶色粘質土中に粗い砂粒と炉壁の小屑が詰っている。③-③'では搅乱層の表土下に地山が検出され、西側にIV層の暗褐色粘質土がわずかにみられる。調査区東側のIV層からは多量にか壺片が出上している。大小取り混せてコンテナ3箱分の量である。そのうち内径6cmを測る木呂穴が1点出土している。土器、鉄滓類の出土はない。

遺構

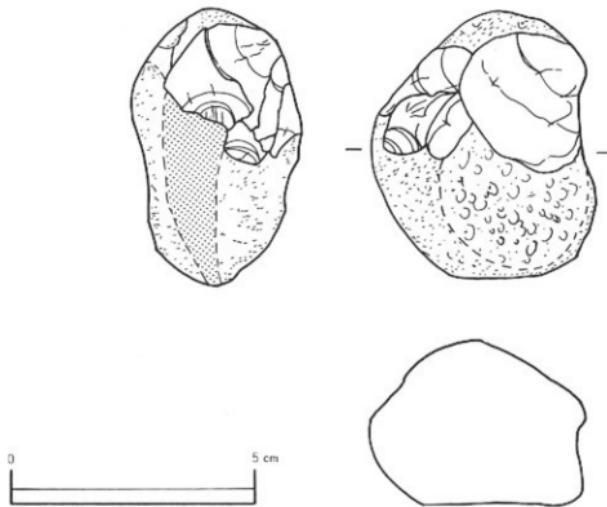
この調査区南側では炭の堆積面が広がり、数穴のビットが検出されている。そのうちビット1は長径90cm、短径50cmを測り、およそ南北方向に楕円形を呈す。深さは6cmと浅い。なかには茶色粘質土が堆積し、粗い砂が混じる。ビット2はビット1よりやや南側に位置する。長径40cm、短径20cm、深さ16cmを測る。ビット1と同様、楕円形を呈し、南北に粗い砂混じりの茶色砂質土がみられる。また緩やかな傾斜面の西端にもごく浅い落込みがみられ、やはり粗い砂混じりの茶色砂質土の堆積が認められる。茶色粘質土をはずすと、ビット1と落込みの底部にはやや細かい砂粒を含む暗紫色のきめの細かい粘土がみられた。また、南側の地山近くと西側地點には炭ががちがちに集積している小規模な広がりがみられる。製鉄関連遺構と考えられるが、南側では表土下に灰白色粘土層の地山がみられるところから、過去に実施された圃場整備工事により、すでに遺構面が切られており、明確な範囲を確認することはできなかった。遺物はビット1からはか壺片が2点出土。調査区南側の地山に近い遺構面では残存長5~10cmのか壺の小片が8点、時代不明の鉄製品と碧玉が2点出土する。

遺物（第16図5、第18図1、2 第19図3）

第18図1は調査区東側のIV層から出土した木呂穴。16×13cm。穴幅は5cmで、断面は浅いU字状を呈し、薬スサが断面の長軸方向に観察される。色調は、外壁から内壁まで4段階



第16図 第1調査区出土遺物（玉未成品）

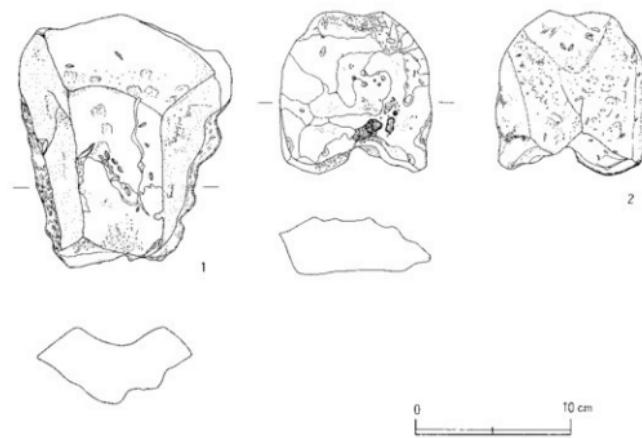


第17図 第1調査区出土遺物（工具）

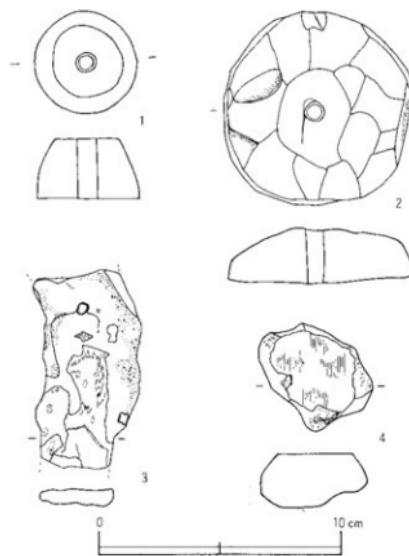
に分かれ、黄色、橙色、灰褐色、黒褐色。内壁は溶解物が瘤状に付着し、所々に気孔がみられる。2はピット1から出土した炉壁。残存長は $10.5 \times 9.5\text{cm}$ 、最大厚は 3.8cm を測る。外壁は淡黄白色を呈し、藁スサ入りである。内壁は熔融面で、凹凸が激しい。色は紫がかった黒褐色を呈す。黒曜石状のガラス質の付着物が少量みられる。第19図3は遺構面から出土した鉄製品の破片。長さ 8.2cm 、幅 3.9cm 、厚さ 0.3cm 。形状は鋸の付着が著しく不明。第16図5はⅢ層から出土した水晶製のなつめ玉未成品。長さ 2.8cm 、幅 1.8cm 、厚さ 1.6cm を測る。縁部には細かい敲打を加え六角柱の角をとる。穿孔面も敲打により平らにつくり、片面から孔をあける。孔径は 0.3cm 。

第2調査区

第1調査区より標高が 1.5m 高い水田地内に設定した。山の裾部に東西軸に広がる平坦面。本調査区は来年度の圃場整備工事では、盛土施行のため掘り下げる必要はなかったが、昨年度の調査の際、かなりの炉壁が出土したので、念のため調査区を部分的に設定し、表土を剥ぎ、下層の状況を検分した。その結果、この調査区は以前の圃場整備により、かなり深い部分まで擾乱を受けていることが判明した。とりあえず、土層確認のため第1トレントを 0.7m 、第5トレントは 1.2m まで掘り下げ、調査を終えた。



第18図 第1調査区B地点出土遺物（炉壁）



第19図 第1、2調査区出土遺物（土製品・鉄製品・鋳型）

遺物 第1トレンチでは搅乱層から多量の炉壁片、鋳型片、碧玉、水晶、土師器、須恵器が出土。第5トレンチでは炉壁、凹石、筋砥石が搅乱層から出土した。第1トレンチから出土した鋳型片（第19図4）は大きいもので9.7×7cm、厚さ4cmを測る。外壁の粘土は黄灰色を呈し、藻スサが入る。内面は灰色を帯び、平滑で摩滅している。長軸方向に細いハケメ状の筋がみられる。第5トレンチから出土した筋砥石（写真図版27）の残存部分は長さ18cm、最大幅12cm、最大厚6.7cmを測る。浅い半月状の溝がわずかに残る。片面のみを使用している。凹石（写真図版27）も破損品。最大幅10cm、長さ21cm、最大厚6cmを残す。凹部の長径は8cm、深さは2.5cmを測る。凹部、周辺面ともに摩滅が著しい。

第3調査区

今回の調査区の中で最も標高の高い地点に位置する。現状は狭い谷間の出口にあたる水田で、湧水がひどいところである。トレンチを2ヶ所設定し、調査を実施した。両トレンチとも上層の堆積状況は同様で、厚さ10cmほどの表土下のII層からIV層までは砂層と暗灰色砂質土が交互に堆積する。V層は0.2~0.4mを測る黒褐色土。その下層に灰色砂層が分厚く堆積するのを確認して調査を終了した。遺物はIII層の灰色砂層とV層の黒褐色土から出土した。

須恵器（第15図）

1は底部に回転糸切り痕を残す杯。口縁部は逆八の字状に広がる。2は器高4.4cmの杯で、底部には『家』と思われる墨書きが記される。やや内湾気味に立ち上がり、底部は回転糸切り痕を残す。3は壺の口縁部片。口縁部は逆八の字状に開く。

玉湯町の主要製鉄遺跡一覧表

名 称	所 在 地	概 要	時 期
史跡出雲玉作跡 宮 墓 地 区	島根県八束郡玉湯町 玉造	鍛錬鍛冶津	6世紀前半
史跡出雲玉作跡 玉ノ宮地区D-I地点	島根県八束郡玉湯町 玉造	製鍊炉1基 鉄アレイ型プラン	7世紀
史跡出雲玉作跡 玉ノ宮地区D-II地点	島根県八束郡玉湯町 玉造	製鍊炉、鉄滓 炉壁	7世紀
狐 避 遺 跡	島根県八束郡玉湯町 布志名	炉底滓	6世紀後半~ 7世紀
砂 子 谷 遺 跡	島根県八束郡玉湯町 林 村	製鍊炉、鉄滓	9~11世紀
高 畑 谷 遺 跡	島根県八束郡玉湯町 玉 造	製鍊炉鍛炉 鉄滓、炉壁	12世紀
蛇 嘴 遺 跡	島根県八束郡玉湯町 玉 造	鉄滓	8~9世紀

5. む　す　び

有ノ木遺跡はかねてから多くの炉壁片や玉未成品が採集されており、生産遺構の存在が指摘されていたところである。今回の調査でも関連遺物が多数出土しており、鉄と玉生産の複合遺跡であることを確認した。今回の調査では、明確な製鉄遺構は検出できなかったが、第1調査区B地点では炭の集積遺構が検出された。数次にわたる圃場整備によりすでに搅乱を受け、全体の広がりは確認できなかったが、かなりの広範囲に炭の集積をみることができた。本遺跡がちょうど小さい谷筋の平坦地に立地していることや、この炭の集積遺構の上段に広がる第2調査区から多くの炉壁が出土することから、この付近に製鉄の作業場があったと考えられ、この炭の集積遺構は溶鉄炉からかきだした廃棄物の捨て場と推定できる。ここから採取された木炭の樹枝を杉原清一氏によって鑑定していただいた結果、クリ、コナラ、ネム、クヌギ、ブナの5種類の樹木が使用されたことが判明した。これらの樹木はいずれも硬い木で、炭に使用した場合、燃焼は遅いが、火立ちがよく、精練用に適していると考えられている。また、この遺跡の上流部にある砂子谷遺跡が鉄滓を伴う精練場と推定されていること（註1）と考えあわせると、鍛冶炉ではなく精練炉の存在も充分に予想される。一方、炉壁が数多く出土するのに対し、流出滓がほとんどみられず、第2調査区でわずかに出土したものを観察すると内部がすかすかで怪しいこと、本遺跡から出土した4点の木呂穴の内径はいずれも5～6cmで、通常の物と比較するとかなり大きいことなどを考慮すると、製鉄以外の金屬物を精製したとも考えられる。（註2）

第1調査区のV層からは古墳時代中期から平安時代まで、VII層からは古墳時代前期から中期までと土器がまとまって出土した。とくにVII層からは甕や甕や瓶が多量に出土し、いずれも煤が厚く付着していることから、生活のにおいが強く感じられた。出土した上器も摩滅が少なく残存状態がよかつたことから、付近に集落が存在していたと考えられる。

また、玉関係の遺物も数多く出土しており、別所地区でも玉生産に関わりをもっていたことが判明し、あらためて玉湯町全体が玉の生産地であったことを認識した。

今後の課題として、有ノ木遺跡から出土した炉壁片の化学分析を実施した上で、遺跡の性格をしっかりと把握し、玉湯町が玉と製鉄の生産遺跡として古代の出雲においてどのような存在であったかを検討していくねばならない。

（註）

註1 穴澤義功「山陰地域における古代鉄生産に関する予察」『古代金属生産の地域的特性に関する研究—山陰地方の銅・鉄を中心として—』島根大学 1992年

註2 杉原氏のご教示による

作業風景



有ノ木遺跡遠景

(北より)



有ノ木遺跡遠景

(東より)



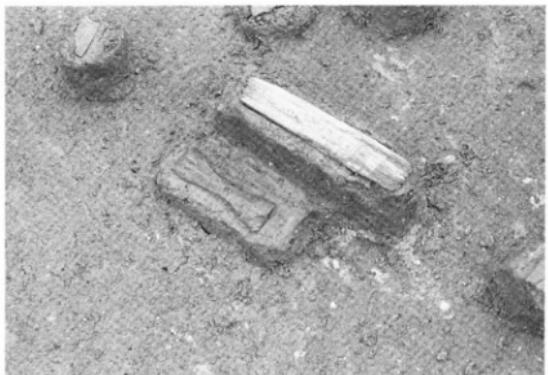
第1調査区A地点西侧
遺物出土状況



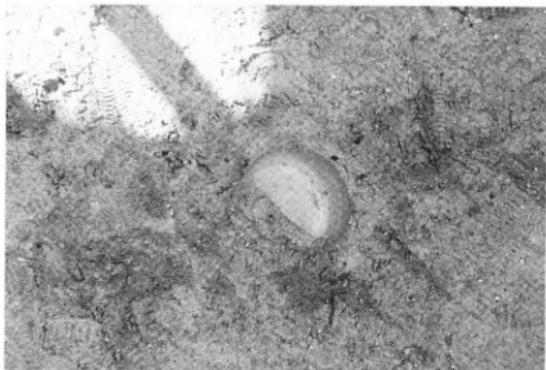
第1調査区A地点西侧
遺物出土状況



第1調査区A地点西侧
つちのこ状木製品出土状況



第1調査区A地点西側
須恵器杯出土状況



第1調査区A地点西側
木製品出土状況



第1調査区A地点西側
ピット群検出状況



第1調査区A地点西側
ビット検出状況



第1調査区A地点西側
ビット検出状況



第1調査区A地点東側
遺物出土状況



第1調査区A地点東側
土師器丸底杯出土状況



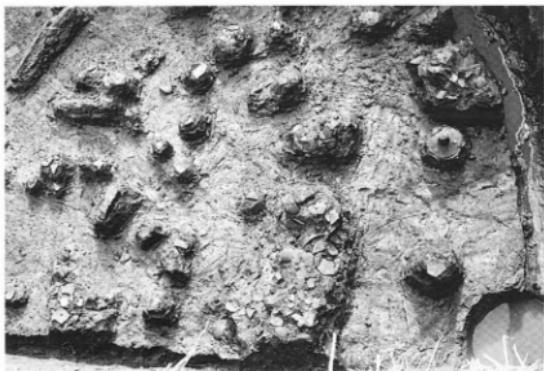
第1調査区A地点東側
土師器・須恵器出土状況



第1調査区A地点東側
遺物出土状況



第1調査区A地点東側
遺物出土状況



第1調査区A地点東側
土器群出土状況



第1調査区A地点東側
はずみ車出土状況



第1調査区A地点東側
大型木製品出土状況



第1調査区A地点東側
八角形状木製品・土製品出土
状況



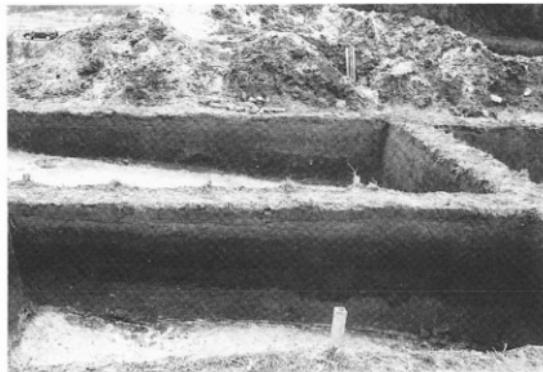
第1調査区A地点東側
木製下駄出土状況





第1調査区A地点土層図

①-①'



第1調査区A地点土層図

①-①'

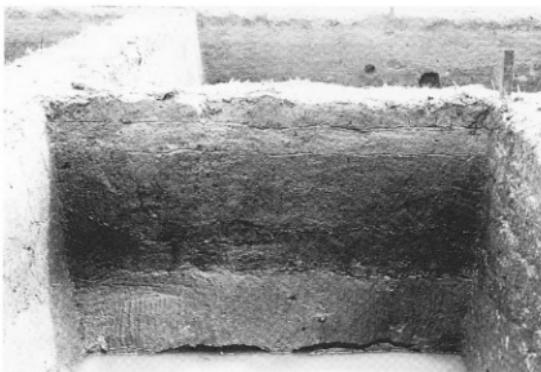


第1調査区A地点土層図

②-②'

第1調査区A地点土層図

②-②'



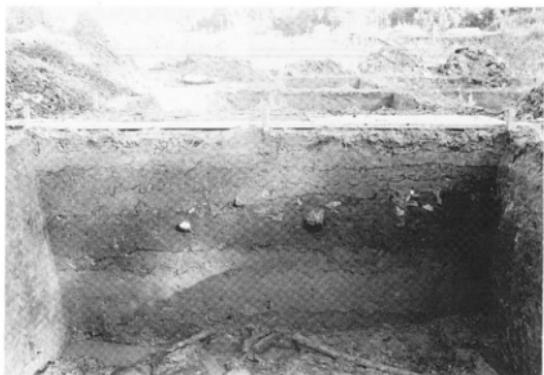
第1調査区A地点土層図

③-③'



第1調査区A地点土層図

③-③'



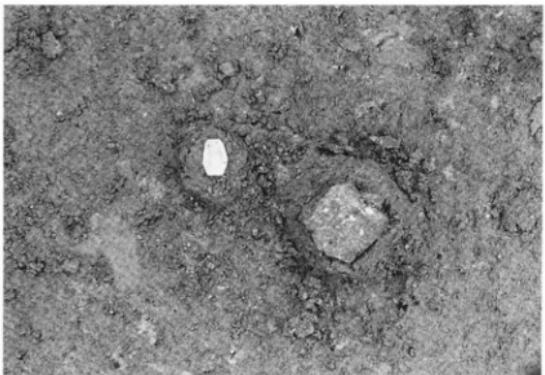
第1調査区B地点東側
炭集積遺構全景（北より）



第1調査区B地点東側
炭集積遺構（東より）



第1調査区B地点
水晶製なつめ玉未成品出土状
況



第1調査区B地点西側
炉壁出土状況

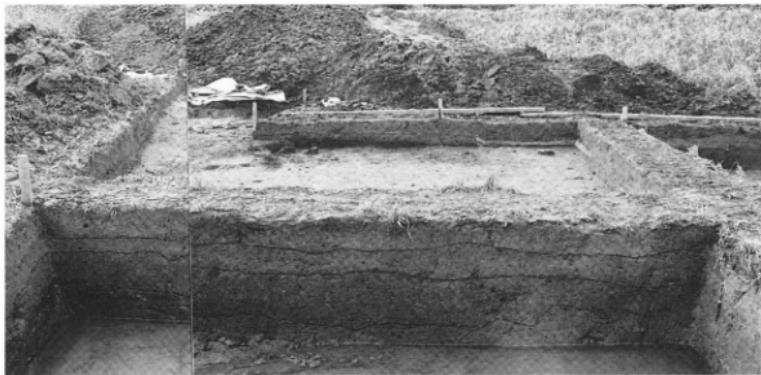


第1調査区B地点西側
炉壁（木呂穴）出土状況



第1調査区B地点
炉壁出土状況





第1調査区B地点西側土層図①-①'



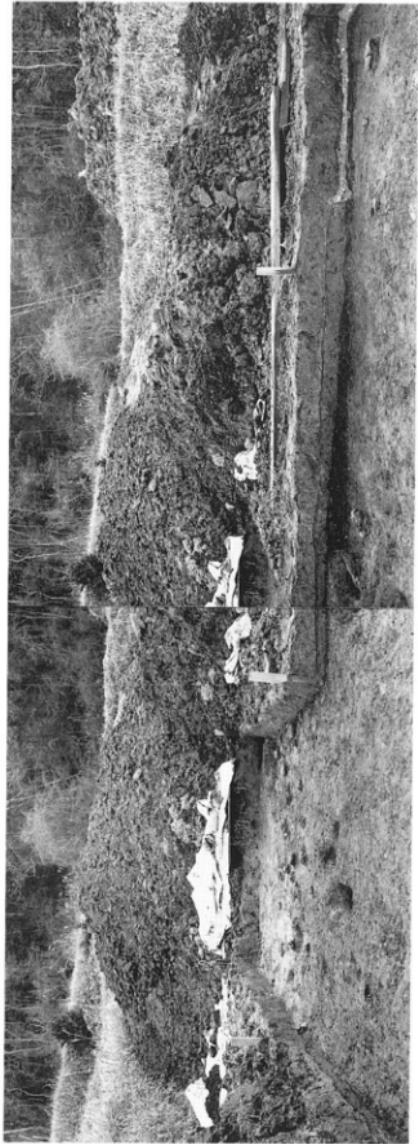
第1調査区B地点土層図

①-①'



第1調査区B地点土層図

②-②'



第1調查区 B地点土層図 ③—③' ④—④'

第2調査区第1トレンチ
土師器高杯出土状況



第2調査区第5トレンチ
筋砥石・凹石出土状況



第2調査区第1トレンチ
東壁土層図



第3調査区
須恵器壺口縁部出土状況



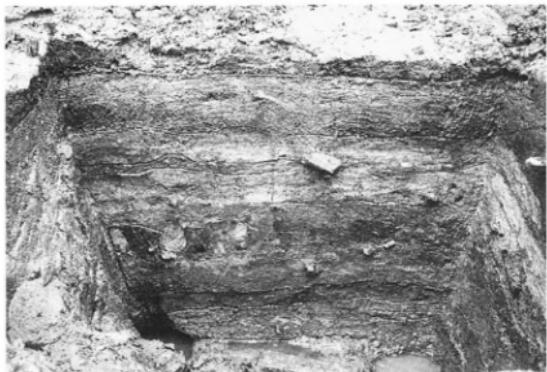
第3調査区第2トレンチ
遺物出土状況



第3調査区第1トレンチ
木製品出土状況



第3調査区第2トレンチ
南壁土層図



第3調査区第2トレンチ
西壁土層図



第1調査区完掘状況
(西より)



第2調査区完掘状況
(東より)



第3調査区完掘状況
(西より)



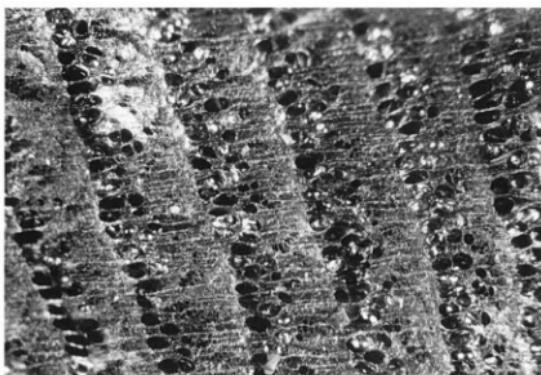
調査後全景 (西より)



第1調査区B地点
炭集積造構面出土木炭



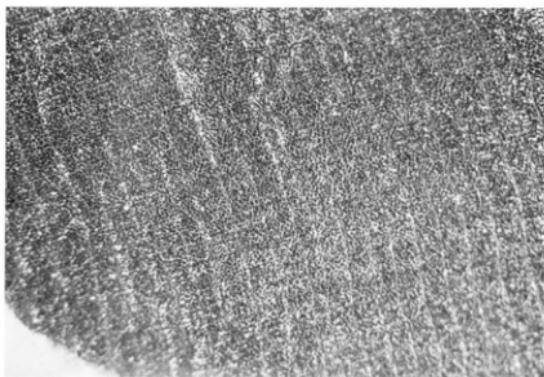
検鏡写真
ネム



クヌギ



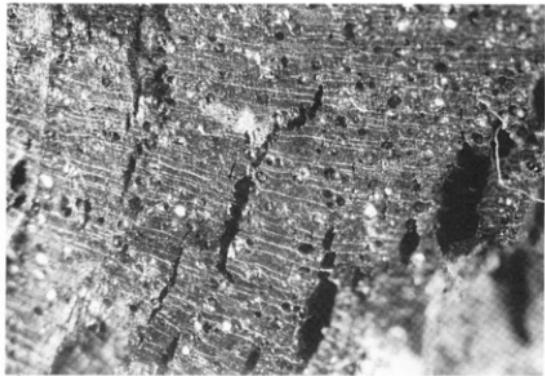
ブナ



クリ



コナラ





7-1



8-1



7-6



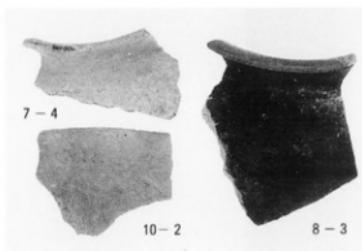
8-2



7-7



8-4

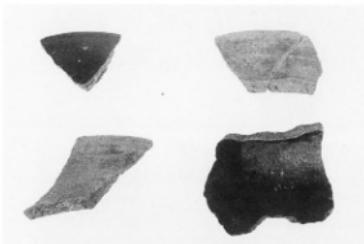


7-4

10-2



第1調查区出土遺物（土師器）



7-2



7-3



7-11

6-5



6-3

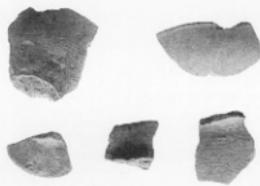


7-9

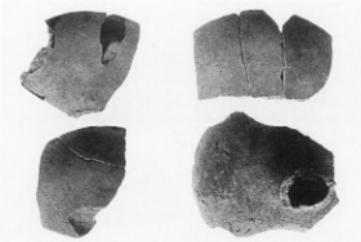


6-13

第1调查区出土遗物（土器）



第1調查區出土遺物（土師器・甕）



9-3



9-5



9-1



9-6

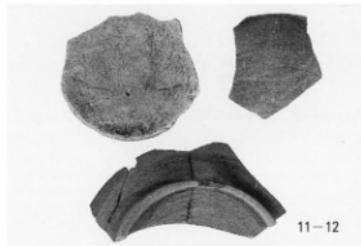


9-7

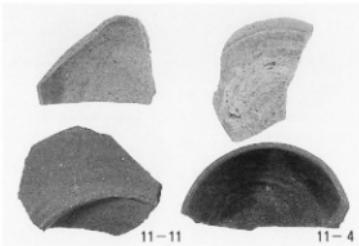


9-8

第1調査区出土遺物（土器器）



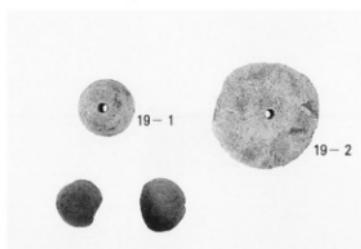
11-12



11-11

11-4

第1調查区V層出土遺物（須恵器）



19-1

19-2



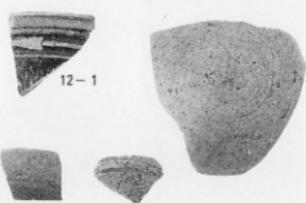
第1・2調査区出土遺物（土製品・石製品）



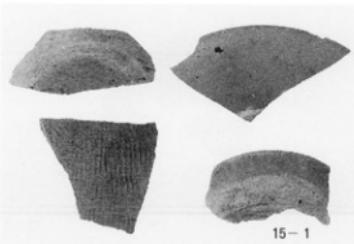
第2調査区出土遺物（鉄型片）



19-4



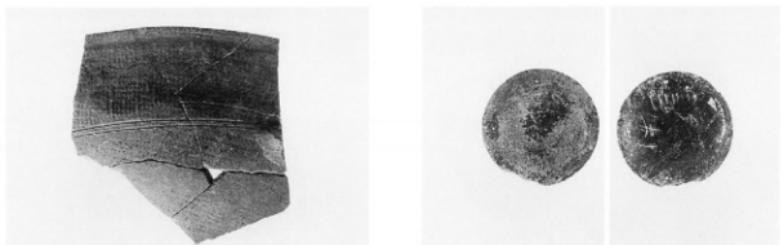
第1調査区VI層出土遺物（須恵器）



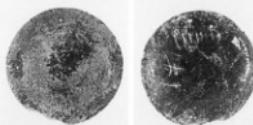
第3調査区出土遺物（須恵器）



第1調査区V層出土遺物（土製品）



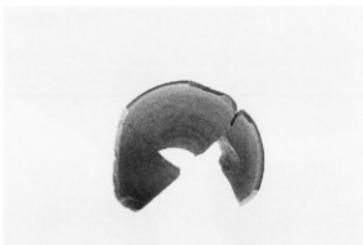
14-1



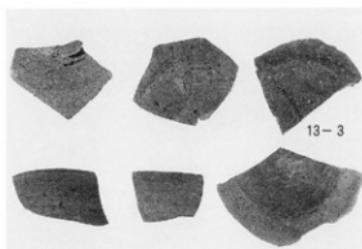
13-1



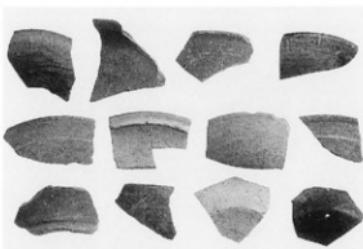
13-4



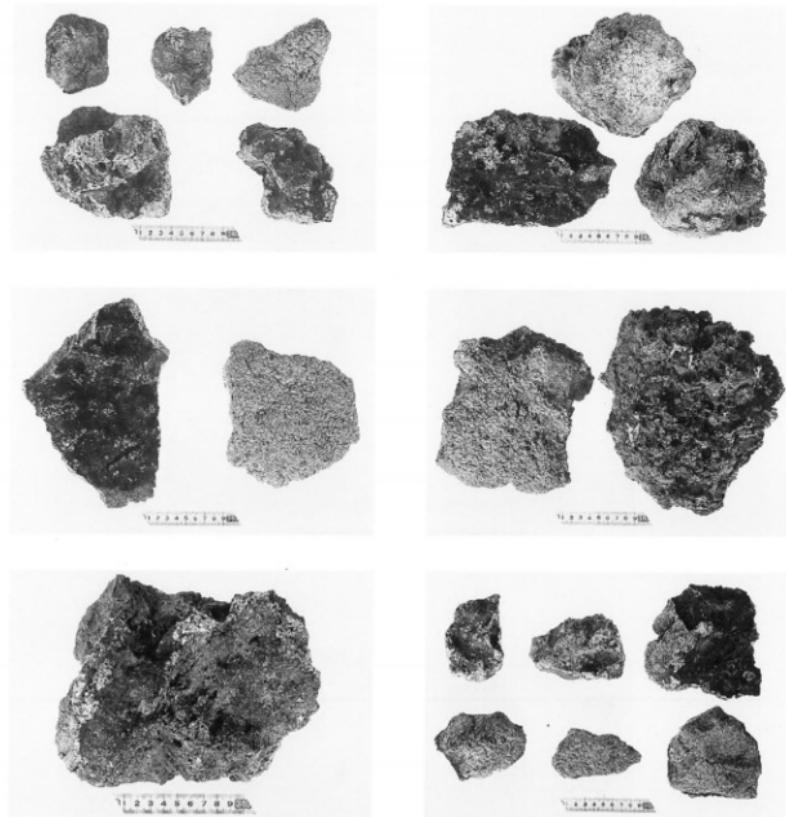
13-2



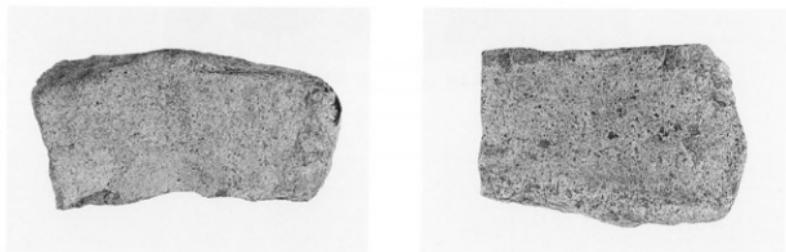
13-3



1995年度試掘調査出土遺物（第1調査区V層）



第1調査区IV層出土遺物（炉壁）



第2調査区出土遺物（凹石・筋紙石）